は　じ　め　に

全世界規模での人権教育の推進を徹底させるために、国連総会で決議された「人権教育のための世界計画」が 2005 年から開始されました。現在、第２フェーズ（2010 年～）に入り、各国は初等中等教育における人権教育の実施を継続させつつ、高等教育における人権教育及びあらゆるレベルの教員や公務員等の人権研修プログラムに焦点をあてることとなっています。

国内においては、「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」等に基づき、「人権教育・啓発に関する基本計画」が策定されました。「基本計画」には、「国民一人一人の人権尊重の精神の涵養を図ることが不可欠であり、そのために行われる人権教育・啓発の重要性については、これをどんなに強調してもし過ぎることはない。」とあります。

文部科学省は、国内外の動向を受け、学校教育における人権教育推進のために、「人権教育・啓発に関する基本計画」に基づく調査研究組織として「人権教育の指導方法等に関する調査研究会議」を設置し、第一次から第三次にわたる［とりまとめ］を公表しました。第三次までの［とりまとめ］は、文部科学省が人権教育の指導方法等の在り方を具体的に示したものであり、これからの人権教育推進の拠り所となるものです。

長野県においては、平成２２年（2010 年）に、県が進める人権政策の基本的な考え方や方向性を示す「長野県人権政策推進基本方針」を策定しました。

長野県教育委員会では、平成２３年（2011 年）に、「人権教育・啓発に関する基本計画」、「人権教育の指導方法等の在り方について［第三次とりまとめ］」及び「長野県人権政策推進基本方針」の基本的方向をふまえ、「人権教育指導の手引」を改訂し、「人権教育推進プラン」としました。

今回作成した「人権教育指導資料集」は、「人権教育推進プラン」に基づく具体的な取組例を掲載しています。自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる人権感覚と、人権を尊重する社会を築いていく意欲と実践力をもった児童生徒の育成を目指して、積極的な活用をお願いいたします。

平成２４年（2012 年）３月

長野県教育委員会

＜「生きる力」の育成と人権教育＞

学校教育においては「生きる力」を育む教育活動が進められている。平成２０年１月の中央教育審議会答申では、現行学習指導要領が重視する「生きる力」の育成という概念が、社会の変化の中でますます重要になってきていること、改正教育基本法を踏まえた学習指導要領の改訂に際しても、「生きる力」という理念の共有が図られるべきこと等を指摘している。

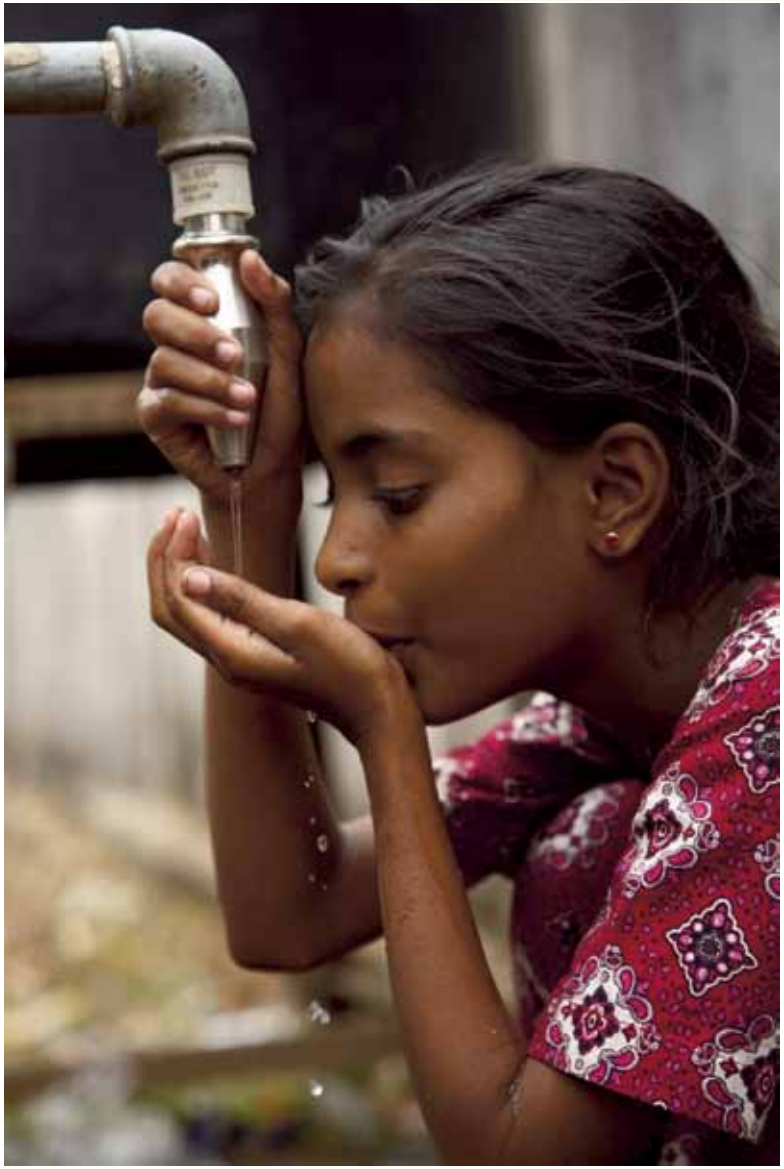
「生きる力」については、平成８年７月の中央審議会答申において、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」などからなる全人的な力として捉えられている。

すなわち、「生きる力」とは、変化の激しい社会において、他者と協調しつつ、自律的に社会生活を送るために必要な実践的な力であり、これらは、人権教育を通じて育まれる他者との共感やコミュニケーションに係る力、具体的な人権問題に直面してそれを解決しようとする行動力などとも、重なりを持つものといえる。人権教育については、このような「生きる力」を育む教育活動の基盤として、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間や、教科外活動等のそれぞれの特質を踏まえつつ、教育活動全体を通じてこれを推進することが大切である。

（平成２０年　人権教育の指導方法等の在り方について［第三次とりまとめ］より）

フォトランゲージ

（活用方法　３９ページ参照）



UNICEF/NYHQ2006-1596/Noorani

「きれいな水が飲める　スリランカ・トリンコマリーの避難民キャンプで」
（提供：（公財）日本ユニセフ協会）

「『お父さんを呼んできて』と“言われ”て、聴覚に障害のある『父』を呼びにきた聴導犬『みかん』」（提供：社会福祉法人 日本聴導犬協会）

フォトランゲージ

（活用方法　３９ページ参照）

高齢者との豊かな交流
「私たちにできること～デイサービスセンターのお年寄りとの交流から～」　（Ａ小学校の学習の様子）

赤ちゃん交流会
「赤ちゃんと和・話・輪！みんながハー-ピー交流」
（Ｂ小学校の学習の様子）

「人権かるた」　～やってみるだけで、なんだか温かい心になりますよ～

「人権かるた」は、平成20年度に文部科学省の委託事業を受け、「人権教育推進のための調査研究委員会」が作成しました。多くの方の応募・協力により、素敵な標語が集まりました。(活用方法等はP40～P44)

絵札･読み札は長野県教育委員会ホームページからもダウンロードできます。
http://www.pref.nagano.lg.jp/kenkyoi/jouhou/jinken_index.htm

紙　芝　居　～高齢者の人権～

飯綱町では、認知症への理解を深めるために「紙芝居　大好きなおばあちゃん」を作成しました。
「おばあちゃん」を中心に、家族と地域の人たちがつながっているお話です。

①ぼくのうちは、おばあちゃんとお父さん、お母さん、そして、ぼくと妹のまりちゃんの五人家族です。
おばあちゃんはいつも元気で朝早くから畑に出て、野菜を作ったり、朝ごはんを作ったり、ぼくや妹のまりちゃんともよく遊んでくれたりします。
おばあちゃんは、いつも、「おばあちゃんが作った野菜はおひさまの味がするから、そのままかぶりついて食べてみろ」と言います。学校が休みの朝は、ぼくも一緒に畑に行って、トマトやきゅうりをとって、そのままかぶりついて食べるのが大好きでした。
そんなぼくを、おばあちゃんはニコニコして見ていました。

②おばあちゃんの得意技はお手玉です。ぼくが小さいときから、おばあちゃんが自分で作ったお手玉でよく遊んでくれました。ぼくもマネをしてやってみるけれど、難しくてなかなかできません。
まりちゃんは、まだ二歳なので、お手玉をかじったり、放り投げたりするので、ぼくは「まりちゃん、ダメだよ」と怒ってばかりいました。そんな時でもおばあちゃんは、優しく笑ってまりちゃんを抱っこして、別のお手玉を持ってきて遊んでくれました。
ぼくもまりちゃんもそんなおばあちゃんが大好きでした。
（認知症でも今まで身体で覚えてきたものは、初期の段階では容易にできます。）

③ある日、ぼくが学校から帰っておばあちゃんの部屋まで行くと、中から話し声が聞こえました。「おばあちゃん、ただいま！誰か来てるの？」と部屋の戸を開けると、お客さんはいませんでした。
「おばあちゃん」とぼくが声をかけると、おばあちゃんは「こうちゃん、お客さんにお茶を出してあげてちょうだい」と言いました。「お客さんはどこにいるの？」と聞くと、ぼくには何も言わずおばあちゃんは鏡に映っている自分に話しかけていました。
（おばあちゃん自身お客さんは来ていると思ってはいるのですが、家族や周囲の反応から、自分自身何か変なことを言ってはいないかという戸惑いも同時にあります。）

④ぼくはびっくりして、お母さんのところへ走っていき、「お母さ～ん、おばあちゃん何か変だよ！お客さんなんていないのに、お客さんにお茶を持ってきてって言うんだよ」と話すと、お母さんは「そう？わかったわよ。お母さんが持っていくからね」と答えました。
あれ？やっぱりどこかにお客さんがいるのかな？とぼくは不思議に思いました。
（お母さんにも戸惑いがありますが、でも状況を受け入れようとしている、そんな気持ちがあります。）

⑤そういえば、時々、おばあちゃん変なことするなあって思うことがありました。
「トイレに行ってくる」といって外へ出ちゃったり、ぼくをお父さんと間違えたり、ご飯を食べたばかりなのに「ご飯はまだ？」って何回も聞いたりしました。
その度に、ぼくが、「ぼくはこういちだよ！こうすけはお父さんの名前だよ！」とか、「おばあちゃん、ご飯はもう食べたじゃない」って教えてあげても、時間がたつとまた同じことをしました。
（忘れるといっても、自分に近しい人、いつも顔を合わせている大切な人は忘れる順は最後の方です。名前を忘れても、顔を覚えている。顔を忘れても「この人は大切な人だ」という感覚で覚えています。）

⑥ある日、おばあちゃんが畑に出たまま帰ってきませんでした。ぼくはあちこち用事にいっているのかなって思っていました。
お母さんは近所を探しに行きましたが、見つかりませんでした。
夜になって、お父さんが帰ってきて、近所のおじさんや消防の人たちと一緒に探しに行きました。
ぼくは心配でたまりませんでした。

⑦夜中になっておばあちゃんは、お父さんと近所の人たちと一緒に帰ってきました。お父さんは、おばあちゃんを叱っていました。
ぼくがおばあちゃんに「どこへ行っていたの？すごく心配していたんだよ」と言うと、おばぁちゃんは「おじいちゃんの病院だよ」と言いました。おじいちゃんはもういないのに…。
（本人は「叱られている」ということはわかっても、その正確な意味はわからないので、隠れて行こうとしたり、部屋に閉じこもってしまったりと、違うかたちで周辺症状が出てきたりします。）

⑧次の日、お母さんはぼくに話してくれました。「おばあちゃんは脳の病気なんだって。認知症といって新しい記憶がなくなって時間や場所がわからなくなったり、物の使い方がわからなくなったり、人や自分のことがわからなくなったりしてしまう病気なんだって」
ぼくは、なんだかこわくなりました。おばあちゃんが病気だったなんて。自分のこともわからなくなってしまうなんて。だから鏡の中の自分をお客さんだと思ってたんだ。
ぼくは、おばあちゃんがどんどん違う人になっていくみたいで、とても不安になりました。でも、お母さんはぼくに優しく言いました。
（親が子どもに大切な話をすることで、話の意味を充分に理解できなくても、その真剣な姿は、子どもの心にしっかりと伝わります。）

⑨「でもね、できなくなった事もわからなくなってしまった事もいろいろあるけれど、おばあちゃんのいい所は何も変わっていないんだよ」
「時々、昔に戻っておじいちゃんの病院に行ってしまうこともあるけどね。こういちにはまだ難しくてわからないかもしれないけれど、お母さんも初めの頃、おばあちゃんが病気だとわからなくて、なんでそんな事するの？って、怒ったりひどいことを言っちゃったりしたの。そうすると、おばあちゃんとっても悲しそうな顔をしてね。だれだって怒られるのイヤだものね。おばあちゃんが病気だってわかってからいろいろ勉強してね、おばあちゃんに悪いことしたなって反省したの。一番つらいのはおばあちゃんだもんね。でも、周りの人たちが病気を理解して見守っていたら大丈夫だからね」
　ぼくはお母さんの話を聞いて、お母さんもおばあちゃんも大変だったんだなあと思いました。まだ病気のことはよくわからないけれど、元気に「うんっ」てこたえました。

⑩おばあちゃんは、ちょっと前とは違うけど、お手玉はぼくよりずっと上手だし、おばあちゃんが作る野菜はとってもおいしい。
　また、おばあちゃんの所にお客さんが来たら、ぼくがちゃんとお茶を出してあげよう。

⑪おばあちゃんがおじいちゃんの病院に行きたくなったら、ぼくが手をつないで一緒に行ってあげよう。
　おばあちゃんが、一人で迷子にならないように近所のおじいちゃんやおばあちゃんにもよろしくお願いしますって言ってこよう。
　ぼくの大好きなおばあちゃん。ずっとずっと元気でいてね。
（「ぼく」が考えたように、身近にいるおばあちゃんに対して、背伸びした援助ではなく、自分ができる範囲の援助を考えていくことが大切です。）